

地域情報（県別）

【長崎】117年続く医院の4代目、父から承継後の来院者は1日3人-白髭豊・白髭内科医院院長に聞く◆Vol.1

訪問診療を継続するために「長崎在宅Dr.ネット」を発足

m3.com地域版

2025年6月14～15日に島メッセ長崎で第7回日本在宅医療連合学会大会が開催される。大会長の片翼を務める、白髭内科医院院長の白髭豊氏は30年にわたり長崎県の在宅医療を担い、長崎在宅Dr.ネットの設立や多職種連携などを通じて地域の医療・介護に貢献してきた。白髭内科医院は長崎市で117年の歴史のある診療所であり、白髭豊氏は4代目に当たる。これまでのキャリア選択や医院承継を決めた理由、在宅医療における課題への取り組み、現在の診療状況とともに、第7回日本在宅医療連合学会大会にかける思いを聞いた。（2025年4月10日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）

▼第3回はこちら（近日公開）

東京医大と北大文学部に合格したが…

——まずは医師を志した理由を教えてください。

私は長崎県で代々診療所を営む家系に生まれました。初代が五島列島で開院し、昭和初期に現在の場所（長崎市片淵）に移設しました。父が3代目として引き継ぎ、その後に私が承継して30年経ちます。通算で117年の歴史がある診療所です。

ただ、私は語学が好きなので、本当は翻訳や歴史の仕事をしたかった。医師になりたくないで、2浪して東京医科大学と北海道大学文学部に受かりましたが、無駄な抵抗でした。父から叱られて、結局は東京医科大学に入学しました。仕方ないと切り替えて、学生時代はそれなりに楽しく過ごしました。



白髭豊氏

——東京医科大学を卒業した後、すぐに長崎大学の第一内科に入局されました。実家に戻らなければいけない理由があったのでしょうか。

いえ、そうではありません。医学生の頃に勉強していた最も興味深かったのがホルモンのフィードバックシステムだったので、卒後は東京女子医大で内分泌を学びたいと思っていました。しかし、父から長崎大学に内分泌学・甲状腺学で国際的に名を知られた長瀧重信教授がいることを教えてもらい、5年生の時に長瀧先生と面談したところ、早々に入局が決まりました。

——長崎大学第一内科に入局して2年後に、国立がんセンター中央病院に勤務することになりました。また東京に戻るようになったのはなぜでしょうか。

実は、6年生の時に母親が肺がんになってしまい、私が長崎に帰ってきてから1年半ほどで亡くなってしまいました。また、研修医として初めて担当した患者さんを肝臓がんで見取る経験もしていたこともあり、がん医療を志すようになりました。そして、柳田邦男が著した『ガン回廊の朝（あした）』を読んで国立がんセンター（現在の国立がん研究センター中央病院）を目指し、自らレジデント試験を受けて、乳がんグループに入りました。

——医局人事ではなく、ご自身で転職したんですね。長瀧先生は…。

長瀧先生にはあまり言わずに実行しました。当時配属されていた佐世保中央病院の院長からは苦言を呈されましたけれど、どうしてもがんの専門の勉強をしたかったのです。

がんセンターでレジデントとして働けるのは3年間なのですが、途中で上司から留学の話を持ちかけられました。1977年にノーベル生理学・医学賞を受賞したAndrew Viktor Schally先生が、がんホルモン療法の研究をしていたので留学希望者を募る旨のFAXが1枚、がんセンターの私の上司の元に届いたのです。これは私の専門とぴったりではないかということで、レジデント2年目の終わりに米国チューレーン大学へ留学しました。

——思いがけず著名な先生から学ぶ機会を得られたんですね。

そうですね。留学期間を延長しないかという話も出ていたのですが、独居で透析をしている父の体調が悪化し、結局は2年経った1994年に長崎に帰りました。がんセンターも辞めることになり、長崎大の長瀧教授からは第一内科の内分泌グループであれば戻ってきててもよいと言っていました。帰国後1年間は長崎大学で勤務しましたが、その間に父が亡くなってしまいました。

——大学に戻ったのは1年だけで、すぐに診療所を承継することにしましたか。

父が亡くなった時には私は学位が取れていなかったのですが、しばらく大学で勉強させてもらうつもりだったのですが、診療所の患者さん20～30人が「継続してもらわないと困る」と泣きついてきたのです。大勢の人にそう言われると、さすがに心が動きます。それで、父が亡くなって間もなく継ぐ決意をしました。

もともとすぐには承継しない予定だったので、父が診ていた患者さんは基本的に周囲の先生に紹介していました。その後に「やっぱり続けます」と言っても、患者さんは戻ってきません。残った患者さんは20～30人で、基本的に2週間に1回の受診ですから1日あたり3人くらいしか来ません（笑）。このままでは食い詰めてしまう、大変な生活になってしまったと気づきました。

そんな中で、学位を取るための研究も大学で続けていました。時間があつたので、診療所の仕事が終わって夕方から大学に行って実験するという生活をして、なんとか学位を取ることができました。



白髭内科医院の外観

訪問診療を継続するために「長崎在宅Dr.ネット」を発足

——訪問診療は診療所を承継した1995年当時から行っていたのですか。

訪問診療については、父が存命で体調が悪いときから私がしばしば代行していました。紙袋に血圧計と聴診器だけ入れて、ぶらぶらと出かけていくわけです。長崎は坂道が多く、階段を5～10分かけて登ることもあります。水平移動の時間が少なめで時間のロスが少ないのですが、垂直移動は夏は暑いし、雨の日は靴下までびしょ濡れになるので大変です。

承継当初から訪問診療を請け負う形で始めてしまって、そのまま看取りを行うこともありました。しかし、私1人で全てに対応するのはとても負担が大きかったです。1人でも重傷者がいると、休めないし、どこにも行けません。これはずっと続けることはできないと確信しました。

それなら、訪問診療を行う診療所の医師たちがお互いをサポートするようなネットワークシステムを作ればいいのではないかとということで、「長崎在宅Dr.ネット」を発足しました。

——長崎在宅Dr.ネットを発足する前に、近隣の医師とはどのようにつながっていましたか。

「大村市在宅ケアセミナー」という有名な勉強会に感銘を受けて、リハビリテーションを熱心に行っている先生と一緒に「長崎在宅ケア研究会」という多職種連携の勉強会を始め、3年ほど続けました。在宅というフィールドで多職種の連携を広げ、仲間が増えていくのが楽しくて、当時はそれが生活の中心になっていました。

あるとき、医師同士の連携が最も悪いことに気づきました。それなら長崎在宅ケア研究会の中で医師の連携組織を作ってみるかということになりました。それが長崎在宅Dr.ネットという形で2003年春に実現しました。私が父から診療所を承継してから8年の月日経っていました。

◆白髭 豊（しらひげ・ゆたか）氏

1988年に東京医科大学医学部を卒業。長崎大学第一内科へ入局後、国立がんセンター中央病院内科を経て、米国チューレーン大学へ留学。帰国後、1995年に白髭内科医院を承継。認定NPO法人 長崎在宅Dr.ネット副理事長、日本在宅医療連合学会理事、全国在宅療養支援医協会代議員、日本プライマリ・ケア連合学会代議員、日本尊厳死協会・ながさき会長。
2025年6月14～15日に島メッセ長崎で行われる第7回日本在宅医療連合学会大会の共同大会長を務める。

【取材・文・撮影＝伝わるメディカル 田中留奈】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

